

ナオヤよ神話になれ

s0811122

第一章 補欠の直哉君

ここは、花小金井という田舎町。この町には、10歳小学5年生になる津幡直哉(つはたなおや)君という野球が大好きな少年が住んでいました。

彼は、花小金井にある少年野球チームMAXに所属していましたが、万年補欠で、たまに試合に出してもらっても、エラーばかりでした。

第二章 不運な事故

ある日の放課後、直哉君はいつもの4人組で学校の近くの公園で遊んでいました。すると、近くの中学校に通う不良集団が彼ら4人組に近づき突っかかってきました。彼らは真っ先にその場から逃げだしましたが、逃げる際、直哉君は道に落ちていたバナナの皮を踏みすべって肩から転んでしまいました。直哉君は、すぐに病院に運ばれましたが、運ばれた先の病院で肩の骨の複雑骨折・全治2ヶ月と医師に告げられました。

第三章 快気祝い

事故から2ヶ月後、直哉君は母に連れられ病院に行き、ギブスはずしてもらいました。

医師は顔にしわを寄せ、ギブスはずしたばかりの腕を不思議そうに見つめていました。

医師は、彼の腕を横に曲げたり上にあげたり色々な角度に腕を動かしました。

医師がちょうどピッチャーが球を投げるような動きをさせようとした瞬間・・・『ビュン！！』小学生の運動量では考えられないスピードで腕がふりおろされた。

これに驚く直哉君と母と医師の三人。

沈黙の後、医師は静かに二人に告げました。

この動きをすることで腕の腱が伸び、その伸ばされた腱がバネの代わりとなり異常なスピードで腕が振り下ろされるのでしょうか。これは極めてまれな例です。

病院からの帰り、母が怪我の完治の快気祝いとして、地元のプロ野球チームKYAETSUのチケットを4枚プレゼントしてくれました。

第四章 弱小チーム K Y A E T S U

直哉君は親友3人を連れ、K Y A E T S Uの応援に行きました。

興奮を隠しきれない状態で入った球場はガラガラだった。

この日先発登板は、直哉君の一番憧れる投手、加藤加斗爛(かとうかとかん)投手だった。

加斗爛は、全盛期時代ものすごい剛速球を投げていたことから、「車いすの貴公子」と呼ばれていた。

しかし、加斗爛は昨シーズン肩を痛め手術をしたが、肩をかばうあまり投球は衰えを見せ、成績は振るわず、恥辱をさらしていた。

この日もスタンドには、ホームランボールが飛び交う状況であった。

そんな状況でも初めてのスタンドでの試合観戦に、直哉君たち4人は目を輝かせながら試合を見るのだった。

そんな中ホームランボールが直哉君の頭上を越え、スタンドに飛び込んできた。

K Y A E T S Uのファンはその敵のホームランボールを手にし、すごい剣幕で睨みつけた。

すると周りのファンから「投げ返せ！投げ返せ！」と次々に声が飛び交いました。

ここでは、敵のホームランボールは、スタンドに投げ返すのが流儀であり、この時ボールを手にしたファンもこの流儀にのっとりボールをスタンドに投げ込んだ。

次の守りのイニングもまた、ホームランボールがスタンドに飛び込んできた。今回は、先ほどとは違い直哉君の近くに飛び込んできた。そのボールに直哉君は飛びつき、敵のホームランボールを手にした。

すると先ほどと同様に周りから、「投げ返せ！」という声が聞こえてきた。

すると一緒に来ていた友達の達也君が、「投げ返せよ」と直哉君に言った。

「わかったよ」と直哉君は思いっきり振りかぶり、スタンドに投げ返した。

投げ返された球はものすごいスピードを出し、スタンドからキャッチャーのミットまで吸い込まれるようにライナーで飛び込んで行った。

茫然とする、友達、スタンドの観客、試合をしている選手たち、投げた本人である直哉君。そしてビップ席から試合を見ていた、近年ではチームの弱体化により観客が減り収益が減ってきて、頭を抱え込んでいたK Y A E T S Uの来シーズンからオーナーになる予定の佐藤雅紀(さとうまさのり)だった。

雅紀は、自分の秘書を呼び、今球を投げた人間を探し出すように命じた。

彼は、「これは、チームのいい売りになる」と不敵な笑みを浮かべるのだった。

第五章 プロテスト

直哉君は試合後、興奮冷め止まぬまま友達4人で家の庭でキャッチボールを行った。

直哉君の放つ球は、子供たちの見たことのないスピードを出し、ボールをキャチする子供を吹き飛ばすほどだった。

この時、たまたま見ていた直哉君の叔父は茫然とした。

「これは奇跡だ！！！」

直哉君の叔父は、KYAETSUにスポーツテストを申し込んだが、KYAETSUのチームにかかわる人間は、誰も子供の力が信用できず断った。

しかし、この時この話を耳にした雅紀が裏から糸を引き、直哉君のプロテストを認めさせた。

雅紀には、子供が出す剛速球。そして若干10歳の少年がプロ野球選手としてマウンドに立つことで、観客を呼び込み、収益になると考えたからだ。

プロテストを受けれることを知った直哉君は、大きなサプライズに驚き、喜んだ。

プロテスト当日。

叔父と母にプロテスト会場に連れられ、マウンドに立つ、直哉君の姿があった。

プロのマウンドは広く、142cmの彼の身長は一際小さく見えた。

彼は、広いマウンドに負けないように大きく振りかぶり投げた。

投げた球は、ものすごいスピードを放ち、プロのキャッチャーのミットに入って行った。

なめていたキャッチャーは、腕を痛めたようで、腕をしきりにふっている。

スピードガンを持っていたKYAETSUの監督は驚いた。彼のスピードガンは、162キロを示していたのだ。

「KYAETSUの救世主が現れた！」

みな驚くなか、雅紀は一人不敵な笑みを浮かべるのであった。

第六章 憧れの人との対面

プロテストに受かった直哉君は、雅紀によって開かれた記者会見にのぞんだ。記者会見の会場には、この年1番の取材報道陣が集まり、多くの話題をよぶものだった。このとき、記者から今ピッチングを見せてくれ！という要望がとびかたが、雅紀がそれをとめて、彼のピッチングが見たければ、是非球場に足を運んでください。と言い放った。試合当日、直哉君はさっそく次の試合が行われる会場である、KYAETSU球場に呼ばれ向かった。彼の入場ゲートは前回観戦に来た時とは違い、選手専用ゲートだった。彼は、選手用のロッカールームに通された。ロッカールームには、テレビでしか見たことのないヒーローたちの姿が目の前にあった。4番の外島翔太、走・攻・守三拍子揃った選手木村龍世がいた。「お前のロッカーはここだ」直哉君はスタッフに自分専用ロッカーに通された。彼の横には夢にまで見た選手、加藤加斗爛の姿があった。直哉君は「車椅子の貴公子だ！サインちょうだい」加斗爛「おれはサインは書かない主義だ」憧れの人との対面はほんの少しの会話で終了した。

第七章 初試合

この日の試合の先発は、観戦した時同様、加藤加斗爛だった。

会場は、直哉君の影響により超満員。スタンドからは、試合には出ていない直哉君の名前が飛び交っていました。

加斗爛はこの日もまた不調であり、チームメイトに取ってもらった大量得点も2点差という緊迫した状態だった。

スタンドからは、さらに大きく直哉君の声が飛び交う。

その時、ベンチにある電話が鳴った。雅紀からだった。

「監督！ガキを出せ。観客は、ガキを見にきてるんだ」

直哉君の名前が呼ばれ、直哉君はマウンドに立った。

万人の観客の声に圧倒された。「ピチャー投げなさい」という審判のせかされた声に対し急いでプレートに立ち、投球モーションに入る。

この時のバッターは、KYO-DAIRAの4番凶子、ツーアウトランナー無しだった。

投げた球はへにゃへにゃのくそボール、4番の凶子にレフトスタンドに飛ばされ、一点を取られた。

次のバッターに対しても、デットボールをくらわして、ツーアウトランナー一塁となった。

ここで、キャッチャーが、直哉君の元により、おもいきり投げることを指示する。

直哉君は、次のバッターに対し、キャッチャーに言われた通りにおもいきり投げた。

それでも浮足立った直哉君の投げた球は、キャッチャーの頭上のはるか上を通り、バックネットの上にあたりポトリと落ちた。

それを見た一塁ランナーは、状況判断をし、二塁も蹴り三塁まで走った。

しかし、キャッチャーの好送球により、三塁でランナーを刺し、試合終了。

直哉君のプロ初試合は、セーブはついたものの、とてもほめられたものではなかった。

第八章 アドバイス

初日の試合を終え、直哉君は、そうとうの落ち込みを見せた。あんな試合をしてしまったのは、大人でも落ち込む。10歳の子供がひょうひょうとしていることができるわけがない。それでも試合はやってくる。球場に向かう直哉君の足は重く、気分も上がらなかった。しかし、「自分の選んだことなのだから」と大好きなお母さんにせかされ、直哉君はこの日もKYAETSU球場に向かった。

KAETSU球場はこの日もまた超満員、直哉君の影響力のすごさを物語るものだった。

しかし応援に来ている観客が、また直哉君の緊張を誘うものだった。

そしてこの日も直哉君に出番が回ってくるのであった。

マウンドに立つ直哉君。周りを見渡すと、たくさんの観客たち。直哉君の足は震えた。

そして、直哉君は、投げることを恐れ投げることを拒んだ。キャッチャーが投げるよう言うが、直哉君は投げれなかった。

見かねた監督が、ここで加斗爛に同じピッチャーとしてアドバイスするように言った。

自分は調子が悪い状態なのにポットでの小学生のプロ野球選手に、指導を施すのは苦痛ではあったが、加斗爛は渋々マウンドに向かった。

加斗爛がマウンドに向かうと、直哉君は、加斗爛にすりようように弱音をはいた。

「僕をもう交代させてよ」

加斗爛は、「男だろ、最後まで投げ切れ」とそっけなく言った。

その後、加斗爛は、続けて「弱い心では負ける。強い心を持て。」と言った。それはまた、自分に言い聞かせるかのような言葉だった。

憧れの人からの励ましの言葉？に直哉君は、力をもらえた気がした。

彼の言葉は、実際に直哉君のピッチングを変えるものだった。

直哉君はこの後の打者を次々に三振で抑え、チームに勝利をもたらした。

チームメイトは、直哉君に賛辞を送り、加斗爛もまた心が躍り、隣にいた監督と抱き合って喜んだ。

加斗爛の言葉が直哉君を変え、勝利をもたらしたようなものだった。

直哉君が、自分のロッカーに戻ると、そこにはボールが入っていた。

それを手に取り、見てみると、そこには「車いすの貴公子」とサインがしてあった。

加斗爛は、直哉君に頑張ったご褒美として、そしてチームメイトと認めた証拠としてそのボールをプレゼントしたのだ。

第九章 栄光と引き換えに・・・

直哉君は、開花した。

試合を次々にこなし、勝利を収めた。

ある日、アウェーで地方に向かう電車の車内の中、直哉君は加斗爛に呼ばれた。

「直哉！こっちにこい」

「何？」

「調子はどうだ？」

「サイコーだよ！楽しい」

「そうか」

直哉君は、試合を思いっきり楽しんでいて、チームメイトともしっかりとコミュニケーションもとれるようになっていた。

それに加え、雅紀は直哉君をテレビCMなどにも出演させ、直哉君を知らない人はいない。海外でも有名になっていた。

ある日、直哉君は、取材が終わってからの公園で親友4人組みで遊ぶ約束をしていた。

しかし、取材があまりにも長引きすぎて、待ち合わせの時間に遅れてしまった。

これは、最近に始まったことではなかったのです。

この日ついに友達3人は、直哉君に怒りをぶつけました。

「お前は、オレたちと野球どっちが大切なんだ？」

直哉君は謝ることしか出来なかった。

友達の絆に亀裂が入った。

そして直哉君の心に追い打ちをかけるかのようなことが、裏で行われていた。

雅紀は、直哉君の叔父を呼び出し、直哉君をメジャーリーグに移籍させる。

君には契約金の10パーセントが入る。

という話だった。二人は、直哉君が入団した時と同様に不敵な笑みを浮かべた。

第十章 裏 . . .

直哉君は、友達と喧嘩し落ち込んで帰ってきた。

すると同じくらいのタイミングで直哉君の叔父さんが帰ってきた。

おじさんは、直哉君の異変に気付き、へこんでいる原因を聞いた。

すると直哉君は友達と喧嘩をし、そして野球をやめたいことを告げた。

するとそれを聞いた叔父さんは、直哉君につかみかかり、「お前は来シーズンからメジャーに行くんだ、辞めるなんて許さない。」

叔父さんは、大金がかかっている直哉君の移籍を実現させるためにやっきになっていた。一方の直哉君は、初めてきいた話に驚いてポカーンとしていた。

すると、その状況を見た直哉君のお母さんは、叔父さんをつかみ下投げで外に投げ飛ばした。

直哉君はお母さんの怪力に驚いた。

お母さんは直哉君をよびこう言った。

お母さんは昔ソフトボールの日本代表だったことを、そして、辞めたいのならばやめてもいいと、やさしく言った。

直哉君は、お母さんとともに現KYAETSUオーナーの元に向かった。

そして今は学校が大事であるからと言い今シーズンで引退することを言った。

オーナーは、「君は偉いね、残念だけど君の引退を認めよう」と言ってくれた。

直哉君は、お礼を言い、そして一つだけ質問をした。なぜ自分をメジャーに移籍させようとしたのかと。

現オーナーは、何かに築いたような顔をし、その場にいた雅紀を不敵な笑みで見つめにやけた。

第十一章 仲直りとタイトル

直哉君は、今シーズンで野球をやめることを友達に伝えた。

そして友達に謝った。友達たちもまた直哉君に謝った。

直哉君は、悩んでいた部分を取り除かれ、野球に集中することができるようになった。

直哉君に残された課題はあとひとつ、優勝だけだった。

この年の終盤。KYAETSUとKODAIRAの両チームとも同一一位で、残すは、この二チームの最終戦にゆだねられることとなった。

最終戦の試合直前、加斗爛が監督に呼ばれた。「今日の先発は、お前で行く。」

最終戦の先発マウンドを任されたのは、加斗爛だった。直哉君は、この大舞台で、憧れの加斗爛が投げれることを喜んだ。

試合は、序盤から一点を守る投手戦が繰り広げられていた。

しかし、8回2アウトランナー3塁。加斗爛は、完全に肩が悲鳴を上げていた。

加斗爛は、最後の打者に渾身の一球を投げた。

加斗爛の渾身の一球は、ボテボテのピッチャーゴロを誘ったが、その打球を取った加斗爛は、手にとったが球を投げるができなかった。

加斗爛は、ボールを持ったままホームに走ってきたランナーに向かい走って、衝突した。

球場中に静寂が走った。

「アウトー」

感性が湧いた。

第十二章 最後の対決

最終回、直哉君が呼ばれた。

直哉君は、元気よくマウンドに上がり、一人を簡単に三振に仕留めた。

二人目の打者もボテボテの内野フライに仕留めた。

しかし直哉君は、マウンドに戻る時、足をつまづき肩から転んでしまった。

チームメイトがかけようが、直哉君は、すぐに立ち上がり、大丈夫と伝えた。

しかし、この時直哉君の体には異変が起こっていた。

最後の打者は、因縁の相手である凶子だった。

直哉君は、凶子に対し思いっきり投げた。しかしひよろひよろのスローボールだった。

凶子は、あまりにも遅い球に見送りをしてしまった。

ベンチ・スタンドからは、本気でやれと怒りの声が飛び交った。

直哉君の肩は、さっきの転倒で肩が元に戻ってしまっていた。

その異変にいち早く気付いたのは、母の茜さんだった。

茜さんはスタンドから、大きな声を出して叫んだ。直哉下投げよ。

直哉君は、元ソフトボールの日本代表の声に素直に聞き、下投げで思いっきり投げた。

すると、ボールは小学生が投げたとは思えないスピードを放ちキャッチャーのミットに吸い込まれた。

観客とチームメイトは、盛り上がりを見せた。

みな「それでいい」と小学生jがその球を投げて当たり前かのように。

それから直哉君は、夢中で最後の一球を投げて、ライバルの凶子を三振に仕留めた。

この瞬間、直哉君は弱小チームを優勝に導いたのだ。

最終章 夢のおわりと新たな夢

試合終了後、二人の引退記者会見が開かれた。

一人は、直哉君。そしてもう一人は、肩を壊してしまった、加斗爛である。

二人は、記者会見で今の気持ちを告げ、引退していった。

それから数カ月後、小学校の野球場に直哉君とその友達の姿があった。

そしてもう一人、見なれた姿があった。

それは、加斗爛である。

加斗爛は引退後、直哉君の野球チームに監督として入った。

直哉君と加斗爛の二人は今、小学生の野球大会で優勝をすることを夢見ている。